

みんなのポジトリ

国立民族学博物館学術情報リポジトリ National Museum of Ethnology

戦前期における＜草地売買＞： 経済に関する聞き取り調査の活用

メタデータ	言語: jpn 出版者: 公開日: 2016-03-23 キーワード (Ja): キーワード (En): 作成者: ガンバガナ メールアドレス: 所属:
URL	https://doi.org/10.15021/00005978

戦前期における＜草地売買＞

—— 経済に関する聞き取り調査の活用

ガンバガナ

秋田国際教養大学

- | | |
|---------------------------------|------------------|
| 1 はじめに | 4 「草地売買」の流通工程 |
| 2 「旅蒙商」の業態 | 4.1 漢人商品の流入過程 |
| 3 「草地売買」における取引市場 | 4.2 「蒙貨」の流出過程 |
| 3.1 草地取引市場としてのバンディ
ド・ゲゲーン・スム | 5 モンゴル人の「草地売買」参加 |
| 3.2 地方集散市場としての張家口 | 6 おわりに |

1 はじめに

果てし無い草原で家畜の群れを追いながら遊牧生活を行っていたモンゴル人にとって、日常生活における衣食住のほとんどは家畜から由来するものであったが、家畜から生産できないもの、たとえば小麦粉や、磚茶、砂糖などの食料品、綿花、長靴、鞭鞍、煙草などの雑貨品の大部分は近隣する農耕民から買わなければならなかった。こうした需要により市場が形成され、相互交易が盛んに行われていたが、その中心的な役割を果たしていたのは、いわゆる「旅蒙商」と呼ばれる漢人商人であった。綏遠、張家口、ドローン・ノールなどモンゴル周辺の地方集散市場に中国内地の商品を仕入れ、それを草原に持ち込んでモンゴル人に供給し、その見返りとして牛や、羊などの家畜、あるいは羊毛や、牛皮などの畜産品、または獣毛皮類か湖塩などいわゆる「蒙貨」を集め、これらの商品をその周辺都市に持ち帰って販売するのが、彼らの商業形態であり、その行為が当時総じて「草地売買」と呼ばれていた。

「草地売買」は戦前期内モンゴルにおいて、モンゴル人を相手とする漢人の商業資本のもっとも基本的な活動形態であり（後藤 1958：43）、主に現地で行商する漢人商人によって支配されていたが、なかには稀であるがモンゴル人が自ら進んで「蒙貨」を周辺の地方集散市場まで携行し、そこの雑貨店や、「牛馬店」、「皮毛棧」等に販売するケースもあった。また、露商瓦利洋行のような外国系商人も少ないながら活動していた。その後、日中戦争の勃発と日本の内モンゴル進出につれ、状況が変わったものの、「大蒙公司」、「蒙疆畜産公司」など日系商社が新たに加えられただけで、モンゴル人の経済状況には根本的な変化はなかった。それに一つの転換期が訪れたのは1940年のホリシヤ制度の登場であり、それによって、モンゴル人の「草地売買」への参加は可能となった。それにつ

いては、終戦直前に梅棹忠夫が内モンゴルに実施したフィールド調査のノートにも、数多く記録されている。

では、「草地売買」とは何か。それがいかに構成され、いかなる工程のなかで動いていたのか。またホリシヤとは何か。その登場は何を意味するものであったのか。これらの問題は、戦前期内モンゴルの経済状況を語るにあたって、いずれも興味深い話であるが、今までの研究ではほとんど注目されず、それに代えて「蒙疆」という地域の境界線を超えた枠組のなかで、当時の内モンゴルの経済問題が取り扱われてきた。したがって、本論でシリーンゴル盟を事例としながら、戦前期内モンゴルにおける「草地売買」の実態を探るとともに、それが近代内モンゴル社会に与えた影響を検証し、さらに、梅棹忠夫の内モンゴル調査資料の重要性について考察を行う。

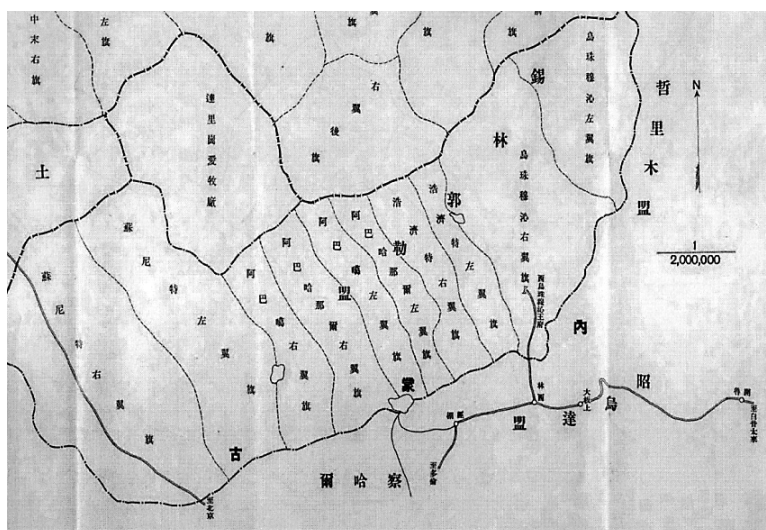


図1 シリーンゴル盟地図

出所：南満洲鉄道株式会社『内外蒙古接壤地域附近一般調査』（1924年）

2 「旅蒙商」の業態

「草地売買」の主役は、漢人商人に代表されるいわゆる「旅蒙商」であるが、その業態は実に多種多様であった。たとえば、張家口市における「旅蒙商」の場合、なかには当地に店舗をもち使用人をして「蒙地」（モンゴル地域）に赴かせ取引をするものと、零細資本を有するものが単独ないし2～3名で合資し、それぞれ自己の責任で「蒙地」に向かい、取引をするものがあつた（蒙疆 1939：5-6）。前者の内部組織は、会社と同様、出資者としての「財東」（資本主）のほかに、経理（経営者）がおり、その下に「夥計（手代）」、「学徒（丁稚）」などが配置され、さらに、その「夥計」のなかには「蒙地」に赴

いて取引を専門に行う者と店内に残留する者をそれぞれ置いていた。それに対し、後者は組織的に比較的単純で、宰領する「掌櫃的」1名と2～3ないし6～7名の「夥計」によって構成され、規模が大きいとき、稀に厨夫が伴うことがあった（南満 1936：33-34）。しかしながらこれはあくまでも資金力と組織構成による分け方であり、その営業パターンと商業形態によれば、さらに「坐莊」や、「行莊」、または「販子」と区別されるが、その詳細な説明は後に持ち越す。その組織と業態のいずれを問わず、草地へ出かけて行商する商人を総称するもう一つの用語に「出撥子」があり、地域によって「撥子」「売買家」「草地売買」「外路」「外管」等の名称も用いられることがあった（後藤 1942a：100）。

さて「出撥子」とは「草地売買」においてもっとも基本的な存在であって、史料によれば、当時、張家口、ドローン・ノール、その他「満洲国」の林西、洮南、開魯等からシリーングル盟へと行商する「出撥子」の数は概算して1,500人にのぼっていたという（大渡 1939：35）。モンゴル人向け商品を携へ、草原の奥地まで出回って、水草を追い転々極まりないモンゴル人宅を訪れ、彼等が要求する物資を供給し、その代わりに「蒙貨」を購入し、それをモンゴル周辺の地方集散市場に持って行って売り捌くのが彼らの本来の業務である。その「蒙貨」の買い取り方法については、関東軍の調査資料には次のように描写されている。

一般出撥子ノ蒙貨買付方法ヲ見ルニ夫レカ各市場ノ坐莊ヨリ派出セル行莊ト、坐莊ヲ有セサル行莊トニ限ラス、兩三名ノ行莊者カ数量ノ牛車ニ蒙人向商品ヲ載積シ、十里ニ一戸、五十里ニ二戸ト謂フ人煙稀ナル土地ニ蒙古包ヲ訪レテ、月餅一包、大布一件ヲ謂フ零碎ナル商品ヲ貸付ケ一定地域ヲ数カ月ニ亘ッテ巡回シ、再ヒ買付回収ノ為数カ月ノ旅ヲ兼ネテ、曩ノ蒙古包ヲ訪ンテハ羊毛五斤、馬鬃一斤ト謂フ零碎ナル決済品ヲ集メル。百斤ノ羊毛ヲ買付ケル為ニハ数十日ノ旅ヲ続ケル。此ノ行事カ年ニ一回乃至二回繰返サレ稀ニハ三回繰返スモノモアル。斯クシテ掻集メタル貨物ハ林西、開魯、貝子廟、多倫方面ニ搬出セラレ再ヒ蒙古人向け商品ヲ仕入ルル（史料1：S11-3-35）。

これが「出撥子」の日常の生活であるが、それには「行莊」と「坐莊」と二つの形態があった。「坐莊」とはモンゴル奥地の諸王府・廟府付近に固定家屋をもって店舗を開設する特権を王公より与えられたものを指し、定住所を有せず常に天幕を張りながら遊牧地を行商するものが「行莊」と呼ばれた（史料1：S11-3-35）。「行莊」にも「坐莊」にも、独立資本をもって小規模な商いをしているものもあれば、経棚、ドローン・ノール、張家口など辺境地域の商業中心地に本拠をおき、数多い支店網の形成し、「蒙地」においてそれぞれの縄張りをもつものもあった（後藤 1942a：100）。

さて、「坐莊」の開設にあたっては、モンゴルの貴族たちとの信頼関係が重要であり、通常は3～4年ぐらいの「行莊」生活をへて王府方面と顔馴染みになってから許可をと

るのが普通であるが、その答礼として商人から王公、または僧侶へ一定の贈答品が送られていた。たとえば、同上資料によれば、シリーンゴル盟の中心地であったバンディド・ゲゲーン・スム（貝子廟）において「坐莊」を開設するとき、通常は商人なら20～30元の礼物を送り、職人であれば5～6元程度であり、開設後は地租の意味で春秋2回にわたって相応の礼物を送っていた。そのほかの旗の例からみてもほぼ同様である（史料1：S11-3-35）。

「坐莊」のなかには地方集散市場の貿易商の支店・出張所等の性質を有するものもあれば、独立経営によるものもあった。彼らは本店あるいは取引先の問屋より仕入れたモンゴル人向けの嗜好品を店舗に置き、客の来店を待って商品を販売するのが普通だが（農林 1940：73）、なかにはさらに「出撥子」を派遣し、附近のモンゴル人と直接やり取りするものもあった。その場合、それらの派遣された人は「行莊」と呼ばれた。

言い換えれば、「行莊」とは「出撥子」の本来の姿であり、なかには地方集散市場の店舗から派遣された者と、「蒙地」市場の「坐莊」より派遣された者がいた。また、個人経営の「行莊」専門業者もいたが、いずれにしる組織構成は同じである（史料1：S11-3-35）。商品の運搬は概ね数輦の牛車によるが、駱駝を使用する時もあった。その場合、使役する「脚遑夫」を雇用することがあった（南満 1936：33-34）。

一隊の「行莊」の一行商期間内に取引扱われる商品は、概ね100元ないし400～500元程度と称され、稀には1,000元を超えるものもあったが、「坐莊」の奥地への発展と同種商人の増加による競争の激化によって市場が圧縮され、小規模の「行莊」が多くなった（南満 1936：34）。当時、シリーンゴル盟においては、大規模な商取引を行っている商人は自ら相当数の「行莊」を有するかたわら他の「行莊」専門業者を利用して集貨に努める傾向にあって、バンディド・ゲゲーン・スム等市場における各「坐莊」は概ねこの類にあたる（史料1：S11-3-35）。

「行莊」のモンゴル人との取引は一般的に信用取引によるものであり、彼らが要求する商品を提供する代わりに、畜産品を得るが、次の取引に持ち越すために、賃借関係が完全に清算されることはほとんどなかった。モンゴル人より獲得した商品を主に「蒙地」内の「坐莊」、 「販子」等に売却していたが、地方集散市場まで自身で搬出し、関係する各商店に売却することもあった（南満 1936：34-35）。

では、東ウジユムチン旗ノーナイ・スム進出の開魯出身の「行莊」石某等3名1班の例を見てみよう。関東軍の調査報告には次のように記録されている。

昨年度ニ於テ資本百元以下開魯ヨリ対蒙取引商品ヲ購入シ、ノーナイスム一員ニ於テ蒙貨ト交換シ、之ヲ開魯ニ搬出シテ二百二十五元ニ売却シ、再ヒ百元ヲ以テ開魯ヨリ物資ヲ購入シ蒙貨ヲ獲テ開魯ニ於テ百八十元ヨリ獲タト称シテ居ル。即チ一人当たり一年間ノ利益七〇元弱ニ該ル。又一班ノ行莊ニ於テ五百元以上ノ商品ヲ携ヘタルモノハ皆無テ一班ノ行莊テハ荷捌カ不可能ト謂ハレテ居ル（史料1：S11-3-35）。

ちなみに、「旅蒙商」の平均年収は、だいたい「経理180元、房長180元、小房長140元、夥計40元、学徒12元、厨夫48元、更夫48元」であったことを考えればそれなりの利潤を得ていたことが明らかであるが、その利益の一部はさらに「出撥子」に対して搾取的立場に立つ「販子」へ流れていた。

「販子」とは、原則として「出撥子」の如く商品を携帯して行商することなく、単身あるいは1～2名の使用人をつれて奥地に入り、畜産品の買い付けを行うものである。取引相手は、概ね王公、牧民および「出撥子」であり、伝統的に信用を利用して取引を行うのが普通であった。その場合、契約に依る取引と票（手形）に依る取引と二つの方法があり、収集した貨物をモンゴル人、または「出撥子」などに依託するか、あるいはその使用人の手を使って、張家口に搬出し、その後、問屋へ売却するか、委託販売を行っていた。「出撥子」による中間利潤の分割取取を避けるには、モンゴル人から直接買い付けする必要があったが、広大な大地で彼らを追うことは「販子」にとっては決して有利なことではなかった。しかも、移動する「包」の一集団が彼らに提供する「蒙貨」の量は彼らが要求する総額にとってはきわめて少量であったことを考えればなおさらであった。そのため、彼らは「蒙地」内の集散市場において大量買い付けをする傾向にあった（南満 1936：36-38）。

では、1935年にバンディド・ゲゲーン・スムに進出した成記蒙荘の事例を見てみよう。

昨年中天津ニ於ケル一部支那貿易商ノ共同出資ニ依リ、成記毛荘カ組織セラレ貝子廟市場ニ出動シ、同地ニ於テ羊毛二十四万斤ヲ買付ケタカ、其ノ買付方法ハ同地ノ老舗タル経棚祐興棧ニ宿泊シ、同地ノ坐荘、行荘ノ所有羊毛ヲ百斤當リ現大洋十八元程度ヲ以テ購シタ（史料1：S11-3-35）。

つまり、草地取引においては資金の豊富な「販子」が支配的な立場にあり、バンディド・ゲゲーン・スムのような「蒙地」集散市場と辺縁の商業都市の集散市場の間では、両者を結合する紐帶的な役割を果たすとともにモンゴル人と「出撥子」を問屋的商舗——「毛皮棧」等に連携させる仲介人的機能をも有していた。取引方法には信用取引が支配的であったが、現金取引も必要に応じて行われていた（南満 1936：38）。

3 「草地売買」における取引市場

3.1 草地取引市場としてのバンディド・ゲゲーン・スム

既述のように、「草地売買」においてさまざまな業態をもつ商人が活躍していたが、その関係は対立するものではなく、逆に互いに依存しながら「蒙地」の独特の環境に順応する機能を有する組織として進化していた。かつて「行荘」とは張家口、ドローン・ノール、林西など辺境都市における雑貨店など問屋的商舗から派遣されることが多かった

が、「蒙地」において多くの「坐莊」が現れるにつれ、それらの「坐莊」から派遣された小規模の「行莊」が支配的となり、次第にモンゴル人との直接取引において重要な役割を果たすこととなった。

関東軍の調査資料によれば、当時、シリーンゴル盟において、東ウジュムチン旗のノーナイ・スム、西ウジュムチン旗の王府、オランハーラガ・スム、ラミーンフレー・スム、東ホーチド旗のワンギーン・スム、オゴムス・スム、東アバガ旗のミント・スム、東アバハナル旗のバンディド・ゲゲーン・スム、ダイラマハイ・スム、西スニトのチャガンオボー・スム、王府などほぼすべての主要な寺院および王府において「坐莊」の姿が見られていた。そのなかで「坐莊」をもっとも多くを抱え、草地取引市場としてもっとも有名だったのは、東アバハナル旗に位置するバンディド・ゲゲーン・スムであり、当時、調査対象となった15の寺院の79の「坐莊」のうち32がここを根拠地としていた。また、手工業に従事する漢人97戸のうち28戸がバンディド・ゲゲーン・スムに住居を置いていた（史料1：S11-3-35）。

そのなかで規模がもっとも大きかったのは経棚に本拠地を置く商人集団であり、配下には数多くの「出撥子」が属していた。彼らはそれらの「出撥子」を西ウジュムチン旗王府、オランハーラガ・スム、ラミーンフレー・スムなど周辺市場へ送り出しながら、きわめて零細なる取引を行っていたが、それが繰り返されるなかで、ダブソンノール・スムなどさらなる奥地において、永興源のような、バンディド・ゲゲーン・スムを仕入れ先か仕向け地とする「坐莊」まで現れた（史料1：S11-3-35）。それはバンディド・ゲゲーン・スムが従来のモンゴル周辺都市の地方的集散市場にとってかわったことを意味するものだけではなく、「坐莊」を基地として侵入してくる漢人社会の勢いが垣間見られる瞬間でもある。

では、バンディド・ゲゲーン・スムにおいていったいつごろから「坐莊」が現れたかについては、資料の関係上、確認することができないが、『蒙古高原横断記』には、その1931年の様子について次のように記録している。

「支那商人の売買場は30戸程度の聚落で、廟の東ラマ塔の少々東北にあり、フェルトの包や革のような草を壁にした包——ウブスン・ゲルや泥壁の屋舎等よりなり」（東亜 1941：79）。

この数字には木匠、鉄匠のような漢人職人が含まれているかどうかは定かではないが、その3年後に実施された鉄路総局の調査資料には、以下のようなきわめて詳細な情報がある。

【バンディド・ゲゲーン・スム（著者）】廟東北十五支里の地点に、漢満人皮襖舗四戸、廟東方二支里の地点に貿易商、画匠、泥匠、木匠、鉄匠、靴商等十五戸、西南一支里十八戸、東南十八支里に二十二戸、同じく三十支里に一戸の漢満商人が部落を形成し居る、蒙古人居

住者は廟の東方に兩三戸を見るに過ぎない（鉄路 1934：74）。

また、それらの漢満商人を営業別に示せば、貿易商29戸、酢醬舗1戸、木匠13戸、泥匠2戸、銅匠1戸、鉄匠1戸、画匠2戸、牛車店1戸、皮襖舗4戸、製靴業2戸、休業3戸、計60戸、その内、貿易商は常時にモンゴル人向け雑貨を陳列して顧客を呼び普通雑貨商と異なる所はなかった。木泥銅鉄画匠は寺廟の御用工人にして、皮襖舗、製靴店は専らモンゴル人を顧客としていた（鉄路 1934：76）。

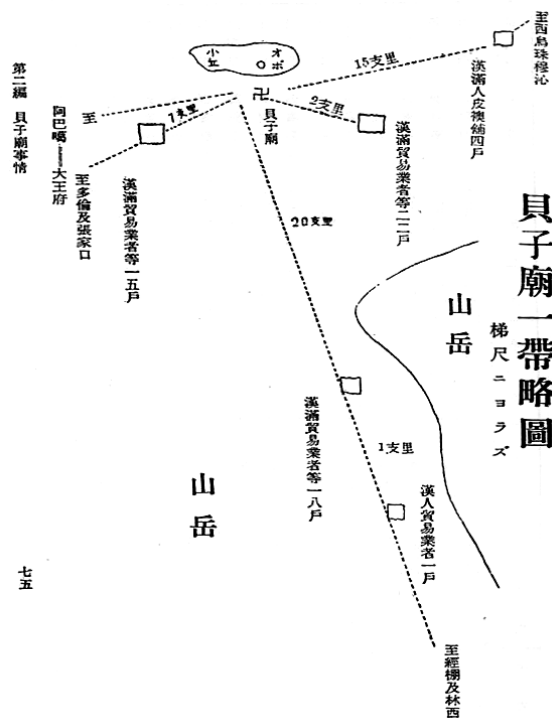


図2 バンディド・ゲゲーン・スム一帯略図（1934年）
出所：鉄路総局『多倫・貝子廟並大板上廟会事情』（1934年）

バンディド・ゲゲーン・スムの漢人商人は、その位置する地点により、東商、西商、南商と称されていたが、有する資本により、「小売買家」、「大売買家」とも区別された。さらにその「小売買家」には固定資本を有する「小売買家」と流動資本による移動的「小売買家」と2種類あった。前者は固定家屋ないしモンゴル人が住む「包」など固定資本を多少有し、資本金を2名ないし5名ぐらいで共同で出し合って経営を行っていたものを指す。販売商品たる雑貨類は主にドローン・ノールあるいは「満洲国」の経棚、林西方面より仕入れるか、あるいは「大売買家」の商品の融通を受けて営業していた。いわ

ば「坐莊」にあたるが、張家口、ドローン・ノールの如く辺境都市に本店を有していなかった。後者の方は全然固定資本を有せず、零細なる資金と牛車1台ないし数台を有し、モンゴル人の如く奥地の「包」から「包」を転々とし、主として雑貨を売買するいわゆる「行莊」である（史料2：S15-117-212）。

それに対し、「大売買家」とは膨大な資本を持ち、組織された経営のもとで商売を行うもので、通常は資本主が代表者1～2名を派遣し、店内全般の経済に当たらせ、さらにその代表者がほかの多くの使用人を雇用し、バンディド・ゲゲーン・スム以外の各地に支店を持っていた。年間取引金額が10万元にのぼると言われ、主に呉服類と麵穀類を専門としていた。呉服雑貨類を商うものは主として西商地区に固定家屋、または「包」を有して居住し、その資本主は北京人が多く、使用人の大半も北京人であった。麵穀類を取り扱うものは南商地区に多く、山西省出身のものが多かった（史料2：S15-117-212）。

純牧畜地域であるシリーンゴル盟においては、主要な商品たる「蒙貨」といえば、周知のように羊、牛、馬などの牲畜か、羊毛、駝毛、羊皮、牛皮、馬皮などの畜産品であったが、旱獭、狐、沙狐、狼等野獣の皮も少なくなかった。モンゴル人はこれらの商品を売り渡すかわりに「旅蒙商」から自らの生活必要品を求めていたが、地理的關係、あるいは遊牧生活の需要性により、それらの輸入品の種類は決して豊富ではなかった（史料1：S11-3-35）。概ね次のように分類できる。①綿布、緞子、其の他織物、靴、帽子類、革具、柔革等、②茶、砂糖、煙草、燒酎、小麦粉、其の他雜穀類、③灯油、石油、其の他日用雜貨品、④家具及び馬裝馬具、⑤仏像、仏具及び裝飾品其の他（南満 1924：203）。

そして毎年、商品の出回る季節になればモンゴル人であれ商人であれ、人が集まりやすい仏教寺院や、王府等にそれぞれの商品を携行して取引を行うが、季節によって流通するものも違っていた。だいたい12月中旬より1、2月にかけて羊、牛等家畜の皮および狐、沙狐、狼、旱獭等野獣の皮が出回り、5月から6月にかけては牲畜類および羊毛、駝毛の取引が盛んであった（鉄路 1934：77-80）。

以下はバンディド・ゲゲーン・スムにおける1934年度の主要な輸入商品の市場相場である（史料1：S11-3-35）。ほかの調査資料と比較して見れば多少出入りがあるが、そもそも「草地売買」においては、いわゆる相場というのは、買手と売手の交渉次第であったため、一定の価格というものはなかったと言えよう。

表1 バンディド・ゲゲーン・スム市場における1934年度輸入商品相場

品 種	買子廟相場 (元)	仕入地	仕入地相場 (元)
小米1斗	0.99	経棚	0.75
筱麵100斤	4.0	経棚	3.5
磚茶1個	0.55	張家口	0.4
白酒1斤	0.20	経棚	0.17
月餅1斤	0.30	経棚	0.20
嗅煙草1包(4分ノ1斤)	0.50	張家口	0.30
白糖1斤	0.24	赤峰	0.16
大布1疋(60尺)	1.80	赤峰	1.60
靴子1足	5.50	張家口	4.5
細布1疋	9.0	赤峰	7.0
洋布1疋	8.0	赤峰	6.0
葫油30斤	6.0	経棚	5.0

出所：「察哈爾省特別調査報告書」より作成

では、いったいどれぐらいの「蒙貨」がバンディド・ゲゲーン・スムの取引市場に回っていたかについては、その正確な数字を出すことは難しいが、鉄路総局の調査資料によれば、当時バンディド・ゲゲーン・スムに滞在していた29の「坐莊」の1934年度における牲畜ならびに畜産品の取引数量は、羊毛111,200斤、駝毛5,750斤、牛390頭、馬102匹、羊17,735頭、羊皮18,850枚、馬皮458枚、牛皮1,578枚であった（鉄路 1934：77）。しかし、この数字はあくまでもバンディド・ゲゲーン・スム在住商人による買い付け数量であり、出回り期になるとここに出動して買い付けをなす張家口、北平、天津、経棚、林西、ドローン・ノールなどの地方から来る貿易商はきわめて多かったため、バンディド・ゲゲーン・スム集散の「蒙貨」の実際の数量はこの数字よりはるかに多かったと考えられる。バンディド・ゲゲーン・スム居住の貿易業者のなかで最古老だった裕興棧の支店経理の話によれば、その1年間の「蒙貨」集散概数は、羊60,000頭、牛1,170頭、馬300頭、羊毛500,000斤、羊皮56,500枚、牛皮4,700枚、馬皮1,370枚であった（鉄路 1934：79）。ところが、この数字は関東軍が当時、同じ裕興棧主人に対して聞き取り調査を行って出された数字とは多少の開きがある。

次の表は、関東軍の調査によるバンディド・ゲゲーン・スムと（史料1：S11-3-35）、シリーンゴル盟の1年間の「蒙貨」集散概数を比較したものである（史料1：S11-3-35）。それによると、バンディド・ゲゲーン・スム市場のシリーンゴル盟の取引市場における割合がいかに大きかったかが分かる。とりわけ、羊、羊毛、旱獭皮の取引においては、その強みが明らかであるが、その取引によって買収された「蒙貨」のおよそ80%が張家口へ流れ、残りは経棚、ドローン・ノール、林西などほかの市場へ渡っていたという（鉄路 1934：79）。

表2 バンディド・ゲゲーン・スムとシリーンゴル盟の1年間の「蒙貨」集散概数の比較

商 品 市 場	羊 (頭)	牛 (頭)	馬 (頭)	羊毛 (斤)	駝毛 (斤)	羊皮 (枚)	牛皮 (枚)	馬皮 (枚)	旱獺皮 (枚)
貝子廟	50,000	700	—	40-500,000	6,000	40,000	3,000	500	40,000
シリーンゴル盟	181,000	16,400	7,000	2,035,000	42,000	324,000	45,300	16,700	110,000
貝子廟の割合	27.6%	4.2%	—	19.7-24.6%	14.3%	12.3%	6.6%	3 %	36.4%

出所：「察哈爾省特別調査報告書」より作成

では、シリーンゴル盟全体において、その流通状況はいかなるものであったのか。関東軍の調査団が、「蒙地」における1か月余りの調査と瓦利洋行、祐興棧などの老舗に対する聞き取り調査、または他の陸軍某機関、張家口領事館、通遼滿鉄駐在員、現地各業者など関係する機関の資料を吟味したうえで出した数字によれば、シリーンゴル地域の貿易市場における主要な「蒙貨」の出回り状況は以下の通りである（史料1：S11-3-35）。

表3 シリーンゴル盟の取引市場における「蒙貨」の出回り状況

種 類		羊 (山羊含) 頭	牛 (頭)	馬 (頭)	羊皮 (枚)	牛皮 (枚)	馬皮 (枚)	旱獺皮 (枚)	羊毛 (斤)	駝毛 (斤)
仕向地										
總数		181,000	16,400	7,000	324,000	45,300	16,700	110,000	2,035,000	42,000
支那向	張家口	81,300	1,300	2,100	219,000	21,000	10,000	80,000	1,480,000	42,000
	多 倫	48,700	2,900	100	18,000	4,700	700	—	35,000	
	合 計	130,000	4,200	2,200	237,000	25,700	10,700	80,000	1,515,000	42,000
	割 合	71.8%	25.6%	31.4%	73.2%	56.73%	64.1%	72.7%	74.4%	100%
滿洲向	經 棚	30,000	200	—	11,000	800	300	—	—	—
	林 西	21,000	3,000	800	50,000	2,500	1,700	—	—	—
	通 遼	—	7,000	3,000	20,000	15,000	3,000	—	—	—
	洮 南	—	2,000	1,000	6,000	1,000	1,000	18,000	—	—
	海拉尔	—	—	—	—	—	—	12,000	—	—
	合 計	51,000	12,200	4,800	87,000	19,300	6,000	30,000	520,000	—
	割 合	28.2%	74.4%	68.6%	26.9%	42.6%	35.9%	27.3%	25.6%	—

出所：「察哈爾省特別調査報告書」より作成

だが、これらの数字は推測によるものであり、必ずしも正確とはいえないが、シリーンゴル盟全体においては、馬と牛を除けば、ほかの商品の大多数が張家口を経由して「支那」方面へ輸出されていた計算になっている。では、地方集散市場としての張家口において、いったいいかなる取引が行われていたのであろうか。次にこの問題について述べたい。

3.2 地方集散市場としての張家口

モンゴル地域の貿易を語る際、張家口が早くも明の時代から名声を築いていたことは周知のことである。当時、張家口大境門を始めとするモンゴルの周辺都市に茶馬市が設

けられ、蒙漢貿易が盛んに行われていたが、正常な商業形態として発達することはできなかったという。その理由について後藤富男は、明朝は長城を境として遊牧民との対立抗争の状態にあったこと、当時の人々の日常生活において、交易に依存することが少なかったことを取り上げている（後藤 1958：47）。

清朝期に入ってから茶馬市の名称はなくなったが、互市はますます盛んに行われていたため、張家口における「旅蒙商」の数は順調に増え続けた。たとえば、康熙初年頃に張家口に約10店を数えた「旅蒙商」は、同じく60年には約80店までに増えている（後藤 1942b：236）。その後、雍正年間には90余店、乾隆年間には190余店、嘉慶年間には230余店、道光年間には260余店、咸豊年間には約290余店、同治年間には350余店、光緒前半には400余店後半には530余店になった（蒙疆 1939：3）。

民国期において、当時、徐樹錚が外モンゴルに乗り込み、活仏に迫り自治を撤回させるや、ただちに軍工をもって張庫自動車路を修築し、軍事的、経済的、政治的にモンゴルを民国に結び付ける方策をとったことで、拍車がかけられ、さらに718店までに膨らみ最盛期を迎えた（後藤 1942b：237-238）。関東軍の調査によれば、民国8年（1919）の張庫（張家口—フレー）自動車営業開始当時は、張家口において、対蒙貿易商の数はなんと1600戸、貿易額は1億5千万元に達し、ドローン・ノールにおいても、貿易商2千戸、貿易総額は4千万元に達していたという（史料1：S11-3-35）。

ところが、その後、ロシア革命の余波、外モンゴルの社会主義化などの影響を受け、漢人商人の往時の黄金時代は著しく衰退し、張家口における旅蒙店舗は、民国18年（1929）に569店にまで激減した（後藤 1942b：237-238）。それに追い打ちをかけたのは、満洲国の成立と日本の内モンゴル進出であり、それにより張家口の「旅蒙商」はさらに衰退し、1940年初めごろに業者の数はさらに約220店まで激減していた。しかもそのなかで、張家口に本拠地を置き、店舗を構えて、営業していたのは、永誠銘、福興隆など13店にすぎなかった。うち5店は明德北に、8店は大境門外にあって、しかもそれらの大部分は開店して間もないものであった。その他は単独、或いは2～3名ないし7～8名の者が寄り合って商品を仕入れ、これを自ら「蒙地」に搬入して売りさばくという、きわめて小規模なものであった（後藤 1942b：239）。

とは言え、シリーングル盟の「草地売買」における張家口の位置は不動であった。たとえば、シリーングル盟一帯において畜産品一般の大部分は張家口を経由して外部へ流れていた。また、シリーングル盟へ流入する漢人商品の大部分も張家口より輸入されていた。

次は1938年度の張家口における13の店舗の資本金、取引額、使用運搬手段、主要取引地などにかかわる情報である。

表4 張家口における13の店舗の1938年度の状況

内容 店名	資本金 (元)	開業年	使用 人数	使用 駝車数	取引高(圓)		主要取引地	主要取引商品
					持込高	持帰高		
永誠銘	8,000	1906	59	牛車80	16,000	20,000	東スニト	鉄製品, 煙草
福興隆	4,000	1931	29	牛車22	2,500	3,300	東西スニト	磚茶, 綿布, 呉服
積慶祥	4,000	1928	50	駝駝36	4,000	5,500	西スニト	ハダグ, 皮靴
隆盛玉	2,000	1915	27	駝駝 8 馬車 8	9,000	11,000	東西スニト	磚茶, 呉服
合盛隆	1,000	1938	20	駝駝16	3,500	4,700	西スニト	雜貨
德義隆	500	1935	22	駝駝10 牛車10	3,500	5,000	東スニト, アバガ, ウジュムチン	食料品
億合源	500	1905	25	牛車16	4,000	5,600	東スニト	雜貨
億合通	480	1916	22	牛車20	5,000	6,500	東スニト, アバガ	帽子, 小間物
永興隆	12,000	1730	59	牛車50	6,500	8,300	東スニト	綿布, 食料品
公慶德	2,000	1896	54	駝駝16	8,000	11,000	東スニト, アバガ	磚茶
義元成	1,000	1903	29	駝駝20	5,000	6,200	貝子廟, 正白, 明安	靴, 馬具
玉華成	500	1917	25	牛車13	6,000	7,500	鑲黃, 正白, 鑲白	呉服, 生煙, 磚茶, 帽子, 馬具, 鉄製品
錦榮長	400	1936	17	駝駝 7 牛車 8	5,000	7,600	西スニト	同上
合計	36,380	—	438		78,000	102,200	—	—

出所：蒙疆銀行調査課『張家口に於ける旅蒙貿易』（1939年）、後藤十三雄「草地における支那商人」（1942年）、後藤富男「近代史内モンゴルにおける漢人商人の進出」（1958年）より作成。だが、開業年については資料同士の相違点がみられており、ここでは上記の二つの論文をもとにした。

表4からわかるのは、ほぼシリーンゴル盟全域が、張家口の「旅蒙商」の取引圏内に入っていたということであり、さらにその店舗の所在地により分類すると、西スニト旗67店、東スニト旗53店、東西アバハナル旗（大部分はバンディド・ゲゲーン・スム）22店、東西アバガ旗17店、東西ホーチド旗6店、東西ウジュムチン旗24店、チャハル盟においては、正白、廂白、廂黃以下の各旗に29店、オラーンチャブ盟四子王府に1店となっている（後藤 1942b: 247）。また、当時、東西スニトを除く、シリーンゴル盟の各市場における「坐莊」の取引物資の流通状況に対して実施した関東軍の調査によっても、バンディド・ゲゲーン・スム在住の「坐莊」が仕入れた総額76,600円の商品の内訳は、張家口61,780円、ドローン・ノール12,800円、林西13,400円、経棚1,400円、バンディド・ゲゲーン・スム1,700円となっており、バンディド・ゲゲーン・スムの取引市場においても、張家口は主な仕入地となっていたことが明らかである（史料1：S11-3-35）。

張家口における「蒙貨」取引市場において、「旅蒙商」というまでもなく主役となっていたが、それ以外にも、さまざまな形態をもつ取引機関があつて、「草地売買」を側面から支えていた。そのなかでまず取り上げられるのは、いわゆる「雜貨舗」である。「雜貨舗」とは、当初は「蒙貨」を携行して交易を行うモンゴル人を店内に宿泊させ、取引を

なすものであったが、後に行政の変化と制度の複雑化により、モンゴル人の往来がほとんどと途絶えたことで、「出撥子」、「販子」などの根拠地となり、旅蒙貿易を中継機関として支えるようになった。当時張家口には義和永、徳恒永、聚元、同記、福慶裕、永盛長などの有名な「雑貨舗」があった。

この種の「雑貨舗」の「出撥子」との取引関係は概ね一定しており、通常、「出撥子」が「草地売買」に出るさい、「雑貨舗」から取引商品を貸し付け、モンゴル人との取引が終わり次第、交易品である「蒙貨」の相当額をもって決済を行うものであったが、決済貨物が不足の場合、次回に持ち越すこともあった。なかには稀であるが現金取引に備えて、「大洋」の貸し付けを行う「雑貨舗」もあったが、後に「大洋」の入手がますます困難となったため、ほとんど行われなくなった。いずれにせよ、「雑貨舗」にとっては「出撥子」と「販子」は商品の販売をモンゴル地域に求めるうえでは、欠かすことのできない重要な存在であり、相互の関係は非常に緊密であった（史料1：S11-3-35）。

次に「毛棧」、「皮棧」、「毛皮棧」などの称号をもつ「皮毛棧」を取り上げることができる。それは「出撥子」、「販子」によって搬出された「蒙貨」を収集して、縁辺市場に参集する各地商人に売却したり（農林 1940：74）、宿泊所、倉庫などを備え、奥地より毛皮を携行する生産者、行商人等を宿泊させ、売買の仲介をしりする問屋の業者である（史料1：S11-3-35）。「出撥子」、または「販子」によって搬出された「蒙貨」のほとんどがここに集結していた。当時、張家口は野獣皮の加工地として有名で、「草地売買」の最盛期に百数十の毛皮商がいたという（日本 1935：189）。

「皮毛棧」と似たもう一つの機関に「畜産店」があり、取り扱われる商品によって「牛店」、「馬店」とも称されていた。「蒙貨」を売買する商人ならびにモンゴル人を宿泊させ、彼らに代わって買手を探し、取引が成立すれば双方から仲介の手数料を取るのが彼らの主な仕事であるが、構内に多数の家畜舎と飼料を備蓄し、販売するものもいた（史料1：S11-3-35）。

また、「牙紀」という問屋と買主の間の取引を仲介する完全なブローカーがおり、取引が成立し次第、その報酬として成立した取引高から一定の割合で手数料をとっていた。「經紀」とも呼ばれていたが、自ら店舗を構えることなく、絶えず関係商人の間に出入りし、商品の需給、移動の状態を熟知していて、売手と買手の間に連絡を取りながら商売を成立させるのが得意であった。そのほか、張家口において、中国本土あるいは「蒙地」へ流入する農作物、または工業品を扱う取引機関として「糧棧」、「山貨店」、「貨棧」、「運賃棧」などをも取り上げることができるが、ここでの言及は控えたい（南満 1936：43-47）。

4 「草地売買」の流通工程

いわゆる「草地売買」とは「旅蒙商」による「蒙地」に搬入される商品の仕入れから始まるが、それらの商人にとっては、仕入れた商品を売るのが目的ではなく、むしろそれを貨幣の代わりに使って「蒙貨」を買い集め、さらにその「蒙貨」を地方集散市場まで携行して売りさばき、そしてその工程によって莫大な利益を得るのが最終の目的であった。したがって、ここには漢人商品の仕入れからそれらの草原での販売と、「蒙貨」の仕入れからそれらの地方集散市場での販売という二つの過程が存在していたが、いずれにおいても、ごくわずかな外国系の商人を除けば、ほぼすべてが漢人商人によって行われていた。では、その流通工程とはどんなものだったのか、ここで草地取引市場としてのバンディド・ゲゲーン・スムと地方集散市場としての張家口を結ぶ貿易ルートにおいて、その実態を検討してみよう。

4.1 漢人商品の流入過程

草地への出発に先立って、張家口の「旅蒙商」は、現地住民の需要に合わせ商品の仕入れを行う。これらの商品の原産地は張家口に限られるわけではなく、綿布雑貨は京津方面、綢緞は杭州、生菸は山西曲沃、磚茶は漢口方面からなど、そこで生産されない商品はほかの地域から調達しなければなかった。したがって「旅蒙商」を相手とする卸商が、各地から張家口に集まっていた。蒙疆銀行によると、1938年には、その数は数百にのぼっていた。業者別にみると、次のようである。

綿布業 85 靴帽業 108 百貨業 136 茶 業 20 皮 靴 業 39 首飾業 17
雑貨業 10 京 業 41 油酒業 42 鼻煙業 2 ハダグ業 2

「旅蒙商」にとってはこれらの店舗は問屋的な存在であり、「旅蒙商」はここから各自の需要に基づいて仕入れを行っていた。1937年度について崇礼県商務会が推定したところによると、張家口の「旅蒙商」が仕入れた商品の主なるものは、綿布26万元、磚茶25万元で飛び抜けて多く、これに続いて煙草8万元、皮靴5万元となっていた（後藤 1942b: 247-249）。

商品の仕入が済めばいよいよ「蒙地」への出発であり、張家口の「旅蒙商」の場合、その時期がほぼ一定し、3月から5月にかけて一斉に出発した。搬入商品の運搬には牛車または駱駝が使用されるが、前者のほうが多かった。駱駝を使用する場合、その管理人はモンゴル人ならば20頭ほどにつき1名、漢人ならば6～7頭につき1名を必要とし、牛車場合は6～7輛ないし10輛につき1名の管理人を雇わなければならなかった。その場合、雇用費は駱駝は1頭につき何元、牛車は積載量百斤につき何元と支払われていた

(蒙疆 1939 : 16)。なお、奥地に出かけるにあたっては、その道順はだいたい一定しており、

- 1) 張家口—徳化—東西スニト
- 2) 張家口—張北—ドローン・ノール—バンディド・ゲゲーン・スム—東西ウジウムチン
- 3) 張家口—張北—四子王府—バンディド・ゲゲーン・スム
- 4) 張家口—張北—康保—バンディド・ゲゲーン・スム

と4通りに分かれていた。そのうち3本の道がシリーンゴル盟を目指していたが、自動車道路とは必ずしも一致するものではなかった(後藤 1942a : 115)。目的地までの距離がそれぞれ違っていたため、所有する日数も異なっていた。最も遠かった東ウジウムチンの場合、牛車で60日も要したという。「蒙地」へ商品を搬入するにあたって、張家口および崇礼において、商品の種類、価額によって課税されていた(蒙疆 1939 : 20)。

張家口の「旅蒙商」の「蒙地」入りは年に2～3回であり通常現地に達すると、それぞれの根拠地を中心として取引を行うものだが、バンディド・ゲゲーン・スムなどに根拠地を持たずに、直接「出撥子」を出すものも少なくなかった(後藤 1942a : 115)。彼らの草地での取引について、従来は物々交換と評する人も少なくなかったが、実際はそれとは違って、貨幣による計算に基づく一種の物々交換の方法であり、その場合、取引商品の何れにも「大洋」などの貨幣を建値とする価額が付けられていた(大渡 1939 : 35)。

こうした方法による取引は、シリーンゴル盟の取引市場において、全体の70-80%を占めており、その原因について、「貨幣価値ニ対スル認識カ極メテ不妥当」(史料1 : S11-3-35)との指摘がたびたび為されていたが、それよりはむしろ政治的不安定により貨幣自体に信頼度が全くなかったともいえる。

たとえば、当時、チャハル省において、チャハル省商業銭局券、交通銀行張家口分行券、その他天津北平における中国、交通、河北省、北洋保商、中国農工、大中、中国実業、中南等各銀行が発行する紙幣が流通しており(南満 1936 : 22-23)、ドローン・ノールだけでも、当初は中国、交通銀行、興業銀行の発行の紙幣が流通し、後に西北銀行金券、山西標、熱河票などさまざまな貨幣がとってかわっていた(史料1 : S11-3-35)。

こうした通貨の混乱が頻繁に起きていた金融事情のなかで、その貨幣を信用して使うこと自体が不可能であり、それにそもそも制度的に拠り所がなかったことを考えれば、たとえ不利であったとしても、その方法以外の選択肢はなかったかもしれない。逆に漢人商人側から言えば、その方法は利を貪るうえで最良の手段であったという(史料3 : 6)。なぜならその過程において、彼らは利益をあげる機会は2回あったからである。それについて後藤富男は次のように指摘している。通常なら商人は仕入れた商品を販売して差益をあげれば、それで一つの過程がおわるが、「出撥子」はさらに牧畜生産物を買叩

いて、この過程においても一度利益をとることができた。それも一つの原因であったかもしれないが、山西商人は物資との交換でなければ一切商品を渡していなかったという（後藤 1958：68）。

また、貨幣による取引方法については、まったくなかったわけではないが、その場合、モンゴル人の間にその価値が認められていた「大洋」のほうが支配的であった（南満 1936：22-23）。時に生活のなかで日常的に使われる布や、磚茶、ハダグなどの商品をもって評価の建値にして取引を行うこともあった。たとえば、当時、西ウジウムチン旗ラミーンフレー・スムにおいて、モンゴル人より漢人職人に対して工費を払う際、磚茶が使われており、職人側も磚茶をもって同廟活仏に対し、借家賃を納付し、磚茶をまるで貨幣同様に利用していた（史料1：S11-3-35）。

それ以外、商人およびモンゴル人の間に信用を有する地方集散市場の商売より発行された「匯票」とよばれる約手が紙幣として使われることもあったが、上層社会の人々に限られていた（史料1：S11-3-35）。しかもそこには、その紙幣への信頼というよりは、個人的な信頼関係が土台となっていたので、実際は貨幣の性格から大きく離脱したものであったともいえよう。史料によると、当時、西ウジウムチン王府において、王が同地「坐莊」新義祥よりシルクとその他の商品を購入するにあたり、張家口德恒永発行の約手をもって決済を行っていた例があった（史料1：S11-3-35）。

だが、モンゴル人との取引と違って、商人対商人の取引は張家口、経棚、林西、及び其の他の有力商売の発行する約手による取引が中心で、現銀の授受は皆無に近かった。理由としては、遠隔地貿易における現銀の輸送などが不便であったことが考えられる。また、バンディド・ゲゲーン・スム、西ウジウムチン王府、東ウジウムチン・ノーナイ・スム附近の商人どうしは国幣（満洲国）の決済に応じることもあったが、ここにおいても多年の取引によって形成された信用関係が土台となっていた（南満 1936：38-39）。それ以外、取引の際、品名、数量、金額、取引月日、代金支払い期日場所等を明記する票を発行して手交し、その後、相手方はこれを指定の場所に携行して支払いを受けて取引が完了する、いわゆる票による取引方法もあったが、主に「販子」と「出撥子」の間で行われていた（南満 1936：38）。

4.2 「蒙貨」の流出過程

草地での取引が終わるや、さっそく周辺市場へ物資を搬送することになる。バンディド・ゲゲーン・スムの場合、その経路として経棚、林西などを通過して「満洲国」へ行くのと、張家口、ドローン・ノールを経由して「北支」へ運ばれるのと二つのルートがあった。その距離、所要日数、運賃は表5のとおりであり（史料1：S11-3-35）、そのなかで張家口へ運ばれる際、だいたい以下の三つの経路が設定されていた。

- 1) 西ウジウムチン—バンディド・ゲゲーン・スム—西スニト—張家口

2) バンディド・ゲゲーン・スム—ヤント・スム—張北—張家口

3) バンディド・ゲゲーン・スム—ドローン・ノール—オラーンノール—張北—張家口 (史料1 : S11-3-35)。

表5 バンディド・ゲゲーン・スムとその周辺市場の状況

	市場名	距離 (支里)	牛車所要日数	運賃 (100斤に付, 単位: 元)
買子廟	張家口	1000	30日	3.0
	多倫	500	12日	1.5
	経棚	300	8日	0.7
	赤峰	900	30日	5.0
	林西	480	12日	1.0
	オラーンハラガ・スム	400	7日	0.7
	オゴムス・スム	200	3日	0.5

出所:「察哈爾省特別調査報告書」より作成

搬送にあたっては牛車を中心であったが、駱駝、駱駝車、大車等、トラックを使うこともあった (史料1 : S11-3-35)。だが、これらの交通手段は主に皮毛、湖塩、木材などの商品を運ぶのに利用されており、羊や、牛など家畜を輸送するときは、牧夫を雇って放牧しながら送ることがもっとも普遍的かつ合理的であった。

バンディド・ゲゲーン・スムから張家口まで家畜を輸送する時の状況について関東軍の調査資料には次のように記録している。

【羊の場合 (著者)】各坐荘ハ主トシテ自家常備ノ店員ヲ以テ輸送セシムルカ、時ニ応ジテハ漢人又ハ蒙人牧夫ヲ雇傭シテ輸送セシムルコトカアル。張家口向ケノ場合ハ、通常五百頭乃至千頭ノ一群ヲ輸送スルコニ三、四名ノ乗馬看視人ヲ要シ、二十日乃至三十日ニテ到着スル。自家使用人ノ場合ハ、乗用馬ヲ貸与シ、道中ノ食料品 (主トシテ白麵、干肉等) 及天幕、炊事道具ヲ携帯セシメ、張家口滞在中ノ宿食料費 (一日四角見當) ヲ給与スル。輸送者ヲ雇傭スル場合ハ一人當七元乃至一五元ヲ支払ヒ、往復ノ食費 (一角見當) ヲ支給スル外乗馬ヲ貸与スル (史料1 : S11-3-35)。

このように、「旅蒙商」によって「蒙貨」は外地へ輸送されることになるが、それにあたっては、通過地域において、家畜の場合1頭単位で、皮の場合1枚単位で細かく決められていた正税を払わなければならなかった。それだけではなく、牙税、護路費、脚戸費、保護費などさまざまな地方税を支払っていた。とりわけチャハル省における地方税はきわめて多岐にわたり、煩雑であったという (史料1 : S11-3-35)。

表6 草地より物資を張家口に搬入するときの正税

種 別	単 位	税 額	種 別	単 位	税 額
牛	1 頭	0.60	牛皮	1 枚	0.10
馬	1 頭	0.80	馬皮	1 枚	0.08
駱駝	1 頭	1.30	駝皮	1 枚	0.06
羊	1 頭	0.125	羊皮	1 枚	0.02
套毛	100斤	0.08	駝毛	100斤	1.00
狼皮	1 枚	0.30	狐皮	1 枚	0.15
羔皮	1 枚	0.025	旱獺皮	1 枚	0.025

出所：「察哈爾省特別調査報告書」より

だが、これらの徴税はほぼすべてが漢人地域において設定されており、モンゴル人地域においては、統一された徴税制度がまだ整備されていなかったため、ほとんどの旗は「坐荘」の開設、「行荘」の入境にあたってだけ、少額の税金をとるか、その代りに贈られるいわゆる「礼品」をもらうぐらいで済ませていた。ここにシリーンゴル盟においてもっとも大きな旗であった西ウジュムチンを例としてみれば次のようである。

満洲国側商人ハ坐荘、行荘ヲ問ハス其ノ入境時ニ於テ、年一回一車輛ニ付現大洋四元ヲ徴税セラルルモ支那側商人ハ無税テアル。坐荘ノ関税ニ就テハ少クモ四、五年ハ王府方面トノ取引ニ従事シ、相当ノ信用ヲ獲タ後テナケレハ許可セラレナイ。許可ト同時ニ其ノ規模ノ大小ニ応シテ、王府ニ対シ五元乃至三十元程度ノ礼物ヲ為シ、其ノ後八年二、三回ニ亘リ四、五元程度ノ礼物ヲ贈ッテ居ル。地方喇嘛附近ニ在ル坐荘ハ廟ニ対シテ月餅一包程度ノ簡單ナ贈物ヲ為ス習慣カアル。又各地寺廟ニ定住シ、或ハ渡り歩イテ居ル皮匠、木匠、画匠、泥匠、銅匠、靴匠等ノ工人ハ夥シイ数ニ上ルモ、之ニ対スル税金其ノ他ノ諸掛ハナイ。唯定住者ハ帰国ノ都度手土産品トシテ二、三元ノ礼物ヲ所在地廟ニ贈ル程度テアル。尚ダブスノールノ採塩税率ハ本旗人ハ無税、他旗蒙古人ハ一牛車（三百五十乃至四百斤積載）ニ付、塩税三錢銀子、装車工錢一錢銀子、漢人ハ一牛車塩税一兩銀子、装車工錢一兩銀子テアル（史料1：S11-3-35）。

シリーンゴル盟の各旗のなかで、最大の取引市場であるバンディド・ゲゲーン・スムを抱える東アバハナル旗だけが、1934年10月から、駱駝、牛、馬は1頭購入につき5角、羊、山羊は5分、皮毛は1牛車、1駄子につき5角、雑貨（各地より搬入される）は1牛車、1駄子につき5角との税率を決め、「旅蒙商」より徴税するようになっていたが（史料1：S11-3-35）、実際は「蒙旗地帯に於ては一般に何等徴税せられることない。蒙地と県治地区との接壤地域である宝昌県、康保県又は張北県に至って税捐局カありて徴税す」（南満 1936：56）との有様で、ほとんど機能していなかった。したがって、さまざまな形式をもつ税金より発生する付加価値をモンゴル人が負担する構造となっていたともいえよう。

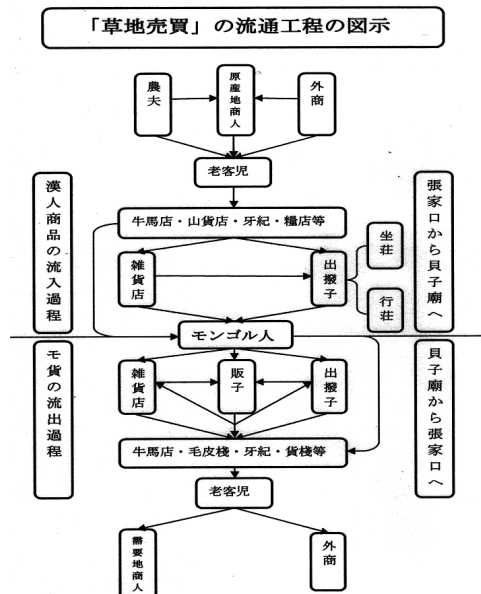


図3 「草地売買」の流通工程の図示
 出所：『蒙疆の畜産』（1940年）、『張家口を中心とする流通機構に就て』（1936年）をもとに作成

そして最後に、奥地のモンゴル人より買い集めた「蒙貨」は、各地の「旅蒙商」によって張家口の取引市場に集まり、さらに中国本土ないしは海外へ流れて行き、「草地売買」の一つの工程が終わるが（史料3：6）、それにあたって、さまざまな取引機関が関与していた。たとえば、家畜の場合、「牛馬店」に販売を委託するのが普通だが、資金の回収を急ぐ時は、「牛馬店」にその手数料や、「牙紀」の手数料、または相当なる危険負担保険金を控除した価額で売却し、その後、「牛馬店」は牲畜交易公会において、「牙紀」と協力して買手に売却することもあった（南満 1936：54）。皮毛の場合、概ね大境門外の「皮毛棧」、或いは「皮莊毛店」、まれに問屋的存在である「貨棧」に対して取引が為されていた（南満 1936：57）。また、張家口より平津地方へ移動するにあたっては、「貨棧」を通じての鉄道で運送する方法もあるが、家畜の場合は、牧夫によって陸路を追って行われるのが一般的であった（南満 1936：54）。海外輸出にあたっては、有力な輸出港としての天津には、英商（仁記）、米商（徳台）、露商（亘利）、日商（三井）等外資企業がかかわっていた（史料1：S11-3-35）。

5 モンゴル人の「草地売買」参加

既述のように、「草地売買」に代表されるモンゴル地域の経済活動は、ほぼすべてが漢人商人によって掌握されていたが、なかには徳華洋行、瓦利洋行などごく一部の外国人

商人がいた。その後、内モンゴル自治運動の進展、日中戦争の勃発によって、その状況が変わったものの、「大蒙公司」、「蒙疆畜産公司」など日系商社が新たに加えられただけで、モンゴル側の経済状況には依然として改善の兆しが見られなかった。

それに一つの転換点が訪れたのは、1940年代に入ってからのことである。すなわち、1940年11月に開かれた各旗長官等の会議において、モンゴル民族の経済生活をモンゴル人自体で確保し、それによって、かつて草原経済を牛耳ってきた漢人商人を排除するということを目的とする（蒙疆 1943）、ホリシヤの大綱が当時モンゴル連合自治政府の主席だったテムチグドンロブ王の主導のもとで可決され、モンゴル人の経済活動への参加が初めて可能となったのである（『蒙古』1941年2月号：171）。その主な内容は以下のとおり。

- (1) モンゴル各旗はその民衆のため、將にその所有する牲畜皮毛等の生産品をできるだけ高価にて販売するようにするとともに米、麵、茶、布等の日常品を廉価にて購入し、以ってその生活の安定を期する。最近数年来、各旗長官代表等はしばしば会議を重ねた結果、西スノト旗、タイプス右旗の事業経営の実例に倣い、各旗民衆に令して生活団体を成立し、これをホリシヤと称す。
- (2) 各旗生活ホリシヤは均しく株主制とし、1株10元とす。各旗民衆は毎戸1株から300株を担任す。また無力の者は毎戸1株とし、その旗のホリシヤ、又は銀行、あるいは富裕者より借用し、毎年その得た利潤に応じて返還する。
- (3) 各旗生活ホリシヤは、盟公署との連絡及び共同事務処理・購入販売等の便宜上、毎盟各ホリシヤは、代表、副代表を各一人ずつ推選する。
- (4) 各旗ホリシヤの会計は各自独立して処理す（呉美恵 1989：121）。

こうしてホリシヤ制度の導入が正式に決定されるや、その方針に従い、テムチグドンロブ王はすぐさま、従来の「モンゴル生計会」を整理して、その下にホリシヤを設けることを決めた。同時に政務院長だった呉鶴齡を会長に兼任させ、中島万蔵を顧問として招聘した（ドムチョクドンロブ 1994：301）。その後、ホリシヤは各旗において相次いで誕生し、わずか1年たらずのうちに、すべての旗に結成されることになるが（簡牛 1976：75）、それを促進したのは、1941年8月のモンゴル自治邦政府の成立である。なぜなら本政権の成立により、モンゴル側は「自治権」を獲得しただけではなく、施政方針として「経済の確立、教育の普及、民生の向上」という三つの目標を打ち出し、しかも、そのなかで、モンゴル地域の唯一の経済機関だったホリシヤの存続と発展を、「経済の確立」政策の重要な一環として設定して、さまざまな対策を講じたからである。

たとえば、ホリシヤ設立直後に、実務講習会を前後3回にわたり開講し、経営と簿記などの実務について指導し、ホリシヤ経営の向上をはかった（表 1976：90）。また、1942年2月26日に開かれたシリーンゴル盟のジャサグ会議では、ホリシヤについて、初年度決算の整理、簿記規格の規定、利益配当の決定、拡充策の決定、経営の合理化、物資配

当の規定などの決議を採択するとともに（『蒙古』1942年5月号：6）、各旗ホリシヤの総合的な指導機関として、張北にホリシヤ連合会を設置し、各旗におけるホリシヤの強化に乗り出した（表 1976：90）。さらに、翌年5月6日に開催された、興蒙委員会第四回定例委員会議予備会議では、新たに「ホリシヤの整備充実案」が採択され、一層の発展を目指した（『蒙古』1943年7月号：77）。

ところが、短期間に多数のホリシヤを設立するには限界もあり、準備不足による経営の行き詰まりなど失敗のケースも少なくなかったという（『蒙古』1943年7月号：77）。また、蒙疆銀行の調査によれば、1942年の実績では漢人商人は依然として優勢であって、その理由の一つとして次のように述べている。

ホリシヤの首脳部は旗の役人であり、通常、旗公署の所在地の固定家屋に店を構え商売を行うが、決して遊牧する一般モンゴル人の跡を追って移動することはなかった。しかも掛買、物々交換などの取引方法を拒否し、現金主義を固持していた。しかしながら、漢人商人の場合、「出撥子」という手段によって、一般モンゴル人の季節による移動先に商品をもってきてくれるだけではなく、取引方法においても相手の好みを応じて柔軟に対応できていた（蒙疆 1943）。

だが、これはあくまでもホリシヤが設立されてからわずか2年後の話であり、このような短期間に長年の歴史をへてモンゴルの草原にその根を深く張っていた漢人商人のネットワークを完全に排除するということは、物理的にも、人的にも事実上不可能であっただろう。それも一つの原因かも知れないが、漢人商人をホリシヤに組み込むような対策がとられていた（梅棹 1990：20-21-38）。

何れにせよ、政府側の一連の努力を経て、各旗におけるホリシヤの内容は著しく充実し、着実に成果をあげていたと考えられる。たとえば、当時、モンゴル地域の復興事業として進められていた模範村、中心村の建設事業に対して、ホリシヤは一定の助成金を提供しており（『蒙古』1943年7月号：96）、また、1943年10月1日に設立された「蒙古皮毛股份有限公司」への融資状況からみても、総資本金1000万元のうち240万元がホリシヤから、そのほかは、自治邦政府側500万元、「大蒙公司」および「蒙疆畜産公司」各100万元、漢人業者60万元となっており、ホリシヤが行った融資額は全体の24%、漢人商人の4倍になっていた（大日 1944：44）。大きく成長していたことが分かるが、ホリシヤとその会社の関係は「旗ホリシヤハ本公司ノ指定取貨業者トナリ指定セラレタル地域ノ取貨ニ當リ一括本公司ニ引渡シ本公司ハ之ニ対シ見返物資ノ供給ヲ為スモノトス」（史料4：E155）とのことであった。

なお、梅棹忠夫が終戦直前に実施した調査のフィールド・ノートにも、ホリシヤについての事例が数多く含まれており、その全体を吟味してみれば、ホリシヤが従来「草地売買」において支配的な立場にあった漢人商人に取って代わり、モンゴル人の日常生活に浸透しつつあった趨勢を読み取ることができる。そのなかからモンゴル人の経済活動

とまったく関係のあるいくつかの事例を整理して見せれば以下のとおりである。

表7 1944年の時の「草地売買」におけるホリシヤと漢人商人の比較

取引相手 事例	ホリシヤ	漢人商人	その他	総数
家畜を売る	9	なし	11	20
羊（ヤギ）毛のゆくえ	23	なし	10	33
買いもの	9	なし	3	12
茶を買う	8	1	3	12

出所：「梅棹忠夫フィールド・ノート」をもとに作成

表7によると、たとえ、それが局地的な小規模な調査であったとはいえ、漢人商人がホリシヤに取って代わられていたことが明らかである。その理由として、「シリングルは、漢人の指定業者は入れない」（梅棹：103-39-5）、「ホリシヤは旗の命令で羊毛の集荷ができる強み」（梅棹：103-39-4）があるなどのことを取り上げることができるが、それよりもっと重要なのは、実は当時、事実上の「半独立国家」（梅棹 1990：7）であったモンゴル自治邦政府の成立により、モンゴル人は自治権を獲得し、政治の主導権を握るようになったことが、その背景にあったと考えられる（ガンバガナ 2007：209-228）。

6 おわりに

戦前期内モンゴルにおいて、「草地売買」という特殊な形態をもつ取引方法があり、それにさまざまな業態をもつ漢人商人たち、いわゆる「旅蒙商」が主役となっていたが、その後、ホリシヤ制度の登場によりモンゴル人の参加も可能となった。本論文ではその実態を検証してみた。結論として言えることは、

第一に、「草地売買」において中心的な存在だった「旅蒙商」は、当初、地方的集散市場としてのドローン・ノール、張家口など周辺都市を拠点とし、「出撥子」としての「行莊」を組織しモンゴルの奥地まで送り、商品の取引を行っていたが、その後、「蒙地」において「坐莊」が現れるにつれて、これらの地域から派遣される「行莊」が減少し、その代わりに、奥地の「坐莊」から出される「行莊」が支配的となった。その結果としてバンディド・ゲゲン・スムのような草地取引市場が形成され、従来の周辺都市の役割を果たすことになるが、それと同時に、「坐莊」を基地としながら忍び寄ってくる漢人移民の様子が垣間見られる瞬間でもあった。

第二に、草地での取引方法に関して、従来は物々交換という指摘があったが、必ずしもそうではなく、実際は貨幣を建値とする物々交換という方法であった。その要因について、モンゴル人の貨幣に対する認識の不足との分析がしばしばあったが、それよりむしろ政治の不安定により、流通していた貨幣自体に信用度がまっただけでなかったとの解釈

疎外されていたことの最大の原因は、自ら政治の主導権を持たず、しかも他者に分割統治されていたことにあるとも言える。

謝 辞

本稿を執筆に当たって、公益財団法人三島海雲記念財団平成26年学術研究奨励金の助成を受けました。ご支援を賜りました公益財団法人三島海雲記念財団ならびに関係者の皆様に深く感謝申し上げます。

参考文献

(一次史料)

「梅棹忠夫フィールド・ノート」, 梅棹忠夫アーカイブズ所蔵, 国立民族学博物館, 大阪。

史料1: 関東軍参謀部「察哈爾省特別調査報告書」(陸軍省—陸満密大日記— S11-3-35), 防衛省防衛研究所, 東京。

史料2: 山脇部隊本部「蒙疆資源要覧(其四)(蒙調資持第一九号, 昭和十五年)」, (陸軍省—陸支密大日記— S15-117-212), 防衛省防衛研究所, 東京。

史料3: 「内蒙古貝子廟附近兵要衛生蒙古人生活状態調査資料(昭和十四年十月)」(満洲—満蒙— 6), 防衛省防衛研究所, 東京。

史料4: 「蒙古皮毛股份有限公司設立ニ関スル件」(E155), 外務省外交史料館, 東京。

(文献資料)

梅棹忠夫

1990 『梅棹忠夫著作集』第2巻(モンゴル研究), 中央公論社, 東京。

表武雄

1976 「左翼旗豪利細亜と私の歩み」『思出の内蒙古』, pp.86-94, らくだ会, 東京。

大渡順二

1939 『蒙疆』(朝日東亜リポート, 第5冊), 朝日新聞社東亜問題調査会, 東京。

簡牛耕三郎

1976 「草原のホリシヤ(協同組合)」『思出の内蒙古』, pp.70-75, らくだ会, 東京。

ガンバガナ

2007 「モンゴル自治邦の実像と虚像」『中国21』27: 209-228。

後藤十三雄

1942a 「草地における支那商人」『内陸アジア』2: 96-126。

1942b 『蒙古の遊牧社会』, 生活社, 東京。

後藤富男

1958 「近代内蒙古における漢人商人の進出」『社会経済史学』1: 43-74。

呉美恵

1989 「呉鶴齡回想録」『日本とモンゴル』24(9): 115-124。

大日本帝国大使館事務所

1944 『蒙古牧業政策の沿革並現況』。

鉄路総局

1934 『多倫・貝子廟並大板上廟会事情』，奉天。

東亜考古学会蒙古調査班

1941 『蒙古高原横断記』，日光書院，東京。

東亜産業協会

1934 『察哈爾蒙古の近情』，新京。

ドムチョクドンロブ

1994 『徳王自伝』（森久男訳），岩波書店，東京。

日本国際協会

1935 『支那各省経済事情』，東京。

農林省畜産局

1940 『蒙疆の畜産』，東京。

南満洲鉄道株式会社庶務部調査課

1924 『内外蒙古接壤地域附近一般調査』（満鉄調査資料第三六編），大連。

南満洲鉄道株式会社産業部

1936 『張家口を中心とする流通機構に就て』（産業調査資料第一編），大連。

蒙疆銀行調査課

1939 『張家口における旅蒙貿易』（蒙疆商業調査資料第一輯）。

蒙疆銀行調査局

1943 『錫林郭勒盟経済事情（第一報）』。

『蒙古』1941年8巻2月号，1942年9巻5月号，1943年10巻7月号。